

* 自動光電子午環室基幹整備工事図面を収蔵

現在天文機器資料館として使っている自動光電子午環室の基幹整備工事の図面を入手した。この図面はA2の冊子(写真1)になっており、58枚の図面が収納されている。前日にはこの基幹工事のアルバムを入手している。このアルバムについては稿を改める。この図面は正式には「東京大学東京天文台自動光電子午環室基幹整備工事 昭和55年 東京大学施設部建築課」(写真2)と記され昭和55年(1980年)9月の日付がある。当時、子午線部にいた鈴木駿策君がアーカイブ室に届けてくれたものである。見開きでA1サイズ、したがって1ページがA2サイズであり、もっと大きな図面が2葉折り込まれている。



写真1 自動光電子午環室の基幹整備工事の図面の冊子

こういった図面は施設課には当然あるものであるが、それぞれの担当部局でも持っていた。現場では担当部局の技術系のものが、施工の様子を施設課の担当者と共に厳しい目で見ている。この図面で建設された自動光電子午環はすでにその役目を終え2000年には観測を終了している。科学技術の進歩は目覚ましいものがあり、天体の位置を正確に測定する目的でつくられた地表に置かれた子午環という望遠鏡は、大気の底からの観測であり、宇

宙空間からの観測にはどうしても精度でかなわないのである。



写真2 自動光電子午環室基幹整備工事図面

この図面をめくって、筆者としては非常に重要なことが分かった。それは筆者が非常に興味を持っている戦前に東京天文台構内に立っていた国際報時所の国際報時信号の受信アンテナの 60m 鉄塔の痕跡について決定的なことが分かったのである。このことについても稿を改めて報告したい。非常に大きな図面なのでアーカイブ室で持っているスキャナーでは図面をスキャンすることが出来ないが、1例をあげると工事位置が写真3のように記載されている。

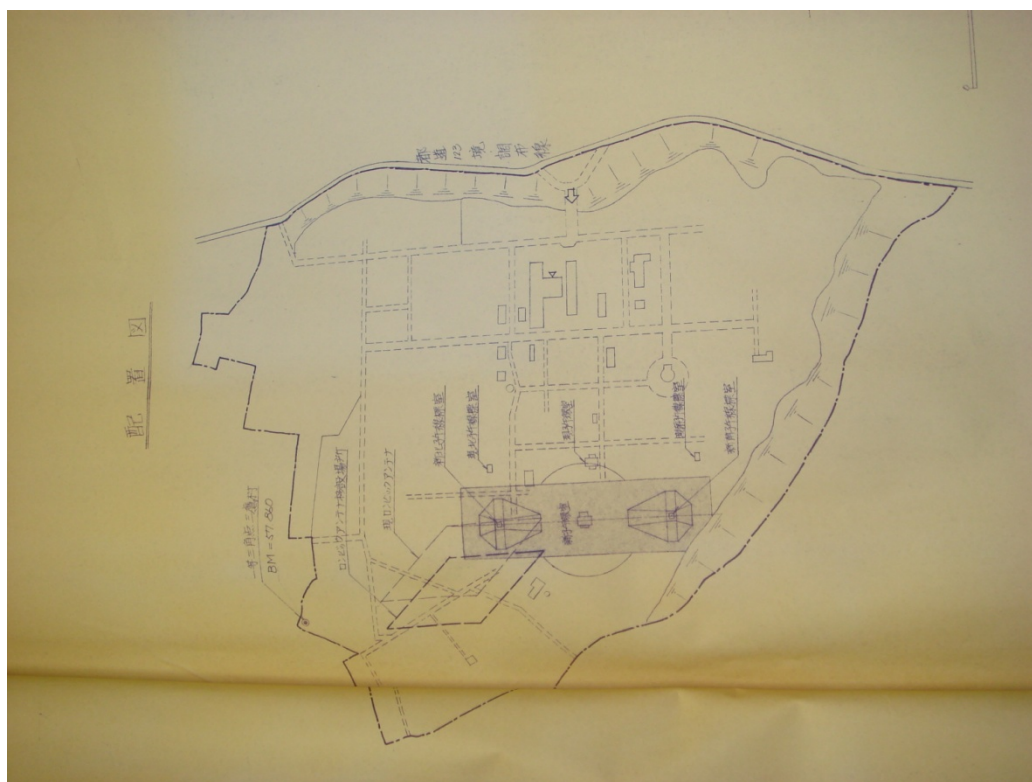


写真2 東京天文台構内の工事位置

東京天文台の敷地は約 10 万坪 (33 万平方メートル) あるが、工事領域が非常に大きいことが分かる。それは、子午環の南北視準点が子午環中心から約 80m の距離に置かれるからである。そのため、工事範囲は南北約 250m、東西 75m に及ぶ。さらに真の真北の引照点まで約 53m、真の真南の引照点までは 31m を要していることが読みとれる。

この図面には整地から建物の施工の詳細が書かれていて記録としてはぜひ残しておきたいが、さて、この大きな図面をどのようにデジタル化したものか！

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp